

献呈の辞

2011年3月11日発生の東日本大震災、福島原発事故と災害が続き、大震災後の復興も、福島の終息も見えない中で今年度が終わろうとしています。この激動の年に、専修大学文学部人文学科社会文化コースから人間科学部社会学科に至る36年の長きにわたって本学に貢献された柴田弘捷先生をお送りすることになりました。人間科学部発足2年後の今年、完成年度まで2年を残して柴田先生をお送りしなければならないのは、大変残念なことです。先生には、これからも人間科学部を見守っていただきたいと願っています。

柴田先生は、1941年、神奈川県にお生まれになり、1965年3月に法政大学社会学部社会学科を卒業されました。同年4月東京都新宿区役所に就職され、1967年3月まで勤務されました。この間、1966年に法政大学大学院社会科学研究所社会学専攻修士課程に進学され、1969年同専攻を修了されました。大学院在学中の1968年7月から厚生省人口問題研究所（現・社会保障人口問題研究所）に厚生技官として就職され、1976年3月まで勤務されました。

そして1976年4月、本学文学部に講師として就任され、人文学科社会文化コースに所属されました。先生ご就任時の社会文化コースの専任教員は、芥川集一先生、西川善介先生と先生の3人だけでした。翌年、私が赴任して4人となりましたが、社会文化コースの学生は、多い時には一学年90人を超えました。今から思うと、隔世の感があります。先生は、専修大学ご在任中、文学部人文学科長、文学部長、社会科学研究所長を歴任され、本学の研究・教育に貢献されました。また、教員の研究教育条件の改善にも貢献され、1987年度、専修大学教員組合書記長を務められ、2007年度、同組合執行委員長を務められました。

先生のご専門は、産業労働社会学ですが、主著『デュアル・イノベーション 電機のレクチャー (LECTURE [MEの時代])』によると、先生は、社会の変化とそれに伴う労働者の労働環境の変化、生活の変化に着目した研究をされてきました。こうした先生の研究関心は、近年では、著書目録に在りますように、中国社会の大きな変化に伴う労働者の生活の変化に着目しての研究へと続いており一貫しています。

また、先生は、1980年代に入って顕著となった日本の労働環境の変化による労働者の生活、労働運動の変化をとらえる実証研究の必要を感じられ、研究仲間と共に、1982年には労働社会学研究会を組織され（1988年より日本労働社会学会）、1993、94年度と代表幹事を務められました。このように、日本の労働の実態をとらえられると共に、その問題点を明らかにし、実践的な活動につなげていく役割を果たしてこられました。

先生は、学生の教育にあたっては、統計数字をよく読むこと、数字からどんな現実を読み解くことができるか、じっくり考えることを求めておられました。柴田先生ご自身、統計数字を駆使された研究発表を数多くなされています。近年、先生は、先述しました中国研究とイギリスにある日本企業の調査研究も行っておられます。こうした先生のご研究や社会的活動を見るときに、先生の専修大学教員としての研究生活は今年度で終了されるとしても、まだまだ、これから研究を発展させて行かれるのではないかと考えています。

これからは、現地調査の折々に、先生のご趣味である推理小説を片手に世界の鉄道を踏破され、時には、ご研究の成果を、私どもにお話しして下さいますようお願いして、献呈の辞と致します。

2012年3月

人間科学部長 宇都 榮子